

## 入選

### ぼくは小さな料理人

静岡県 竜禅寺小学校

六年 波多野 頼亜

コロナウィルスが流行し、たくさんの人たちの生活が変わりました。学校に行く日が減ったり、父の夜勤が増えて、ぼくは親せきの家ですごすことが多くなりました。

親せきの家では、父の妹であるおばが、リモートワークで家にいるため、仕事しながら家事をしています。ぼくの家は父と二人暮らしのため、おばが、

「料理できるようになって、お父さんを手伝ってあげてね。」

と、ぼくに料理を教えてくださいました。

ぼくは、料理に興味があったので、教えてもらえることがうれしくて、いろいろな料理を覚えていきました。卵焼き、カレーライス、ポテトサラダなど、はじめは何をするときも、おばがぼくの動きをじっと見ていたけれど、最近は、

「頼亜に任せている間に、わたしは洗い物ができるから楽だよ。」

と言ってくれるようになり、ぼくががんばると、「えらいね」とほめてくれるので、ぼくはもっとがんばりたくなりました。

ぼくが、すっかり料理好きになったころ、学校に、プロの料理人である前川さんという人が「仕事についてのお話」を聞かせてくれるためにやってきました。

ぼくは、前川さんに写真をいっしょにとってほしいとお願いし、ぼくが料理に興味があることを伝えました。すると前川さんが、

「料理人になったら、うちに来てね。」

そう言って、コックさんのぼうしと名刺を手わたしてくれました。ぼくは、うれしい気持ちでいっぱいになりました。

そして、今年の夏休み、ぼくは「マイ包丁」を買いました。もちろん、ぼくのおこづかいです。夏休みの間、おばに教えてもらいながら、料理のうでをみがきました。

コロナウィルスが流行して、遊びにも出かけられず、たいくつそうにしているぼくに、おばが料理を教えてくださいましたこと、プロの料理人である前川さんが、ぼくに言葉とプレゼントをくれたこと、それがなかったら、ぼくはたぶん料理も作ろうとしなかったのかもしれない。何かに夢中になって取り組む楽しさを知らなかったかもしれない、と思いました。

毎日、得意になった卵焼きを楽しそうに作っている姿を見て、おばが、

「頼亜が将来プロの料理人になったら、わたしが育てたってじまんしちゃう。」

と、ニコニコしながら言いました。

もしぼくが料理人になったら、ぜひごはんを食べに来てください。

そして、ぼくと同じように、料理に興味をもつ子どもがいたら、やさしい言葉をプレゼントしたいと思います。